

あれから十年

北海道寿都高等学校 三年 木村 春菜

二〇十一年三月十一日、午後二時四十六分。誰も経験したことがない日本最大級の大地震と大津波によって、日本中が恐怖に包まれた。

あの時私は、小学校三年生だった。バレーボール少年団に所属していて、この日も練習があった。卒業式の準備の関係から、スポーツセンターで練習をしていた。いつもと変わらず時間が過ぎていった。

「東北地方で地震が起きています。今すぐ小学校へ避難してください。」消防署の方が来て、私たちは避難を促された。何が起こったのか全く分からず、私はその場に立ち止まったままだった。ようやく状況を理解した私は、管理人がつけたテレビを見て驚いた。状況を理解したはずなのにまた何が起きているのか分からなくなった。

小学校に着き、最初は体育館に避難した。特にやることが無かったため、その日出された宿題を終わらせた。春とはいえ、まだまだ寒さが厳しい日が続いていた。そのため、図書室の暖房が温まってからは、図書室へ移動した。本を読んだり、先輩達から教わりながら折り紙をしたりと、有意義な時間を過ごしていた。そんな中、一人の先輩に「誕生日いつ？」そう聞かれた。私は心の中ではっとした。そういえば、今日は自分の誕生日だったんだ。「今日だよ。」この一言がすごく言いづらかったような気がする。それを聞いた先輩達や周りにいた人から、驚きの声が上がった。そりゃそうだよな。私はそう思った。予想もしていなかったことが起こり、そんなことなんて自分でもとっくに忘れていたのだから。

ようやく帰宅することができた。家族の顔を見て一安心した。父が持っていた無線からは常に誰かが話している声が聞こえ、その音でより一層、親近感が増した。私が住む地元は幸いにも軽い揺れで済んだ。テレビを見ると、津波で車が流されている様子や、家が流される様子が映し出されていた。人生で初めて地震と津波の恐ろしさを知った日だった。学校で避難訓練は何度か行われたが、津波なんてなかなか来るものではない。そう決めつけてしまっていた。

翌日、私の誕生日パーティーをするため、近くのコンビニエンスストアにケーキを取りに行った。しかし、店員さんから「ごめんなさい。届いてないんだよね。」そう

言われた。昨日起きたことって、そんなにも大きな影響を与えるんだ。まだ小さかった私でも、被災地と地元の「道」を感じた。商品が届くって当たり前のことではないのだな。この震災を通して、荷物が届くありがたみを学んだ。

あれから数日後、被災地はようやく落ち着きを取り戻した。私は友達からよく、「誕生日の日に震災なんてかわいそうだね。」と、何人からも言われた。あの時の私は少し悲しい気持ちの方が勝っていた。しかし、今思うと一生忘れられない大切な日だと気づいた。未だに誕生日を聞かれて答えると、かわいそうだねと言われるが、今では誇りに思っている。

あの時、被災地に支援できたことは一つしかなかった。それは、少年団でバレーボールを送ったことだ。このボールが被災地に届くのか心配だった。なぜなら、ケーキのことが頭をよぎったからだ。これが確実に届いて、一人でも多くの人が笑顔になりますように。そう願うばかりだった。笑顔になれるのは普通に感じて、実は普通ではないのかもしれない。今の被災地のことを考えると、強くそう感じた。その後の少年団活動では、私の中で「感謝」を意識して取り組んだ。今、大きな悲しみに包まれている人たちの分まで精一杯頑張ろう。心の中でそう決めていた。あのボールは今、どこにあるのだろう。「道」を通じて被災地との絆が生まれたにちがいない。もっともっと被災地に支援できたら良かったな。しかし、小さかった私には方法が全く分からなかった。せめて募金くらいしておけば良かったな。たくさんの反省はあるが、今、この「道」を歩んでいる。

あれから十年、私は高校三年生になった。小学校から続けてきたバレーボールも今年で終わりを迎えた。今は進路活動に励んでいる。そんな私は迷うことなく、看護師の道を進もうと決めた。震災の影響が一番大きい。あの時、何もできなかった反省を生かし、せめて医療で人を助けられたらと思う。今は世界が苦しい状況の中、最前線で働いてくださっている方々には感謝しかない。また、いつ来るか分からない災害で今度は私が助ける番かもしれない。次は、知識と技術がある状態で人々を助けたい。今でもたまに震災の動画を見ることがある。やはり、いつ見ても胸が締めつけられる。また、大切な人と連絡がつかない時でも仕事に従事しなければいけない人のことを考えると、頭が上がらない。そして、人の心を支える医療関係者はすごくかっこいい。いつか、あんなふうになれたらな。たくさんの希望を持ってこの「道」に進む。